九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドと『タン・フュチュール』誌

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

https://doi.org/10.15017/18941

出版情報：Stella. 29, pp.41-44, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドと『タン・フュチュール』誌

吉　井　亮　雄

ジッドと文芸雑誌の関わりは，最初期の同人誌『ポタッシュ＝ルヴュ』『ラ・コンク』に始まり，『白色評論』『レルミタージュ』『誌と散文』『アンテ』，そして無論のこと『新フランス評論』，また『コメルス』『ムズュール』などを経て，最晩年の『ラルシュ』『レ・カイエ・ド・ラ・プレイアッド』に至るまで，大小合わせれば優に百誌を越える[1)]。まさに諸誌の興亡とともに歩んだ文学的生涯であった。単に作品や論文を発表しただけではなく，彼が編集陣に名を連ねた雑誌も少なくないが，これらは程度の差こそあれ，いずれもすでに論述の対象となっている。本稿では，現在まで指摘されたことがないジッドと短命の小雑誌『タン・フュチュール』との関わりについて若干の情報を提供したい。

同誌はガブリエル・ラングロワなる人物を主筆として 1934 年 1 月に創刊された。隔月刊を謳い，3 月には第 2 号を出したが（両号とも僅か 32 頁建て，頁付けは通号），結果的にはそれをもって呆気（あっけ）なく終刊となる。ラングロワは第 1 次大戦中から第 2 次大戦後にかけて数冊の著書を上梓しているものの[2)]，具体的な経歴となると不明な点ばかりといってもけっして過言ではない。筆者の寡聞にも依ろうが，各種印刷物がその名を引くことは稀であり，またフランス全土の大手図書館に収蔵された自筆稿類の検索サイト Calames でも，ラングロワ発受信の書簡をはじめ，関連資料はいっさい見当たらない。したがって『タン・フュチュール』創刊に至る経緯など，実証的な解明は今後の調査に委ねざるをえないが，とりあえず本稿では同誌の構成・内容に触れつつ，そこに活字化されたジッド書簡を紹介する。

先ずは，創刊号の巻頭に置かれたラングロワの「プログラム」を読もう――

> 若き世代の精神の有り様（よう）にたいする一般大衆の無理解に打たれ，我々は彼らの思想の伝播を目的とする雑誌の創刊を決意した。
>
> 『タン・フュチュール』は，芸術・文学・哲学・政治・都市計画など，あらゆる知の

領域において建設的なプログラムを掲げる。

我々は既成秩序の破壊ではなく，それを進展させ，未来の緊要事にたいし人・物を適合させることを期す。

新しく力強い思想を有する未知の人々のうちより決然と選ばれし協力者たちに，我々は探求心と理性の許すかぎり，あらゆる表現の独立性を委ねるものである。

ガブリエル・ラングロワ[3)]

ラングロワはこの綱領を，新雑誌の「後援委員会」に参加して欲しい作家・文学者たちに前もって送り，協力を要請していた。創刊号に載った一連の受諾通知の日付は前年の 11 月下旬から 12 月上旬に集中しているので，ジッドの次の返信も同時期のものと見て差し支えあるまい（したがって発信地もおそらくは彼が 11 月 10 日から翌月 18 日まで滞在したスイスのローザンヌ）――

拝略

ご丁寧なお手紙と，そこに込められた親愛の証にいたく感じ入っております。

しかし以下にいくつか指摘を述べさせていただいてもよろしいでしょうか。

若き世代の精神の有り様にたいする一般大衆の無理解をあまり過度に嘆かれませぬように。私はなにも青年たちが十分に理解されていると申し上げているのではありません。しかし，一般大衆がかくまで新世代を考慮に入れ，新世代の体現する未来を案じ考えたことは一度もありませんでした。若者たちがこれほど耳を傾けられ，大事にされたことは決してなかったのです。

今や青年層と，それに先行する世代，衰退する世代とのあいだに関係を打ち立てようとすることがよろしいことなのか……。私には確信が持てません。若者たちが最も価値を発揮するのは，たいていの場合，彼らの反対・反抗によるからです。過去に背を向けることで，ひとは未来に向き合うのです。

しかしながら貴誌の後援委員会の一員として私の名前を記載なさるのには喜んで同意いたします。私の著作が私自身の世代の反響をほとんど呼ぶことがなかったのは，それが「未来の世代（タン・フュチュール）」に向けられていたが故なのです。

私の親愛の念をお信じいただきたく。敬具。[4)]

書簡には「若き世代の精神の有り様にたいする一般大衆の無理解」など，上掲綱領と同一の文言が認められる。また「既成秩序の破壊ではなく，その発展的推進」を掲げるラングロワにたいし，むしろ「過去＝先行世代に背を向けること」を説くのは如何にもジッドらしい態度表明である。詩的な表現で青少年を美しく挑発した『地の糧』の作者はその信条をいささかも変えていない。

後援委員会に加わった他のメンバーもすべて文学・哲学関係者であった。参

考までにその名をアルファベット順に列挙すると，アランを筆頭に，ドニ・アミエル，ガストン・バティ，サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ，ジャック・シャバンヌ，ジョルジュ・デュアメル，H-J・マゴッグ，ヴィクトル・マルグリット，クロード＝ロジェ・マルクス，シャルル・メレ，ガストン・ラジョ，ポール・ルブー（アンドレ・アミエの文学上の筆名。事情は不詳だが，彼だけは第2号の委員名簿から外れている）。表紙裏の委員一覧ではそれぞれの紹介が付されるが，ジッドの肩書きは，著名度の高さゆえだろう，「哲学者・作家」のアランと並んで最も短く，ただ「作家・戯曲作者」と記されている。ちなみに各委員のあいだに特段の連携があったとは思われない。たとえばジッドとブーエリエとの関係は，1896年末の「ナチュリスム」をめぐる接近とその後の急速な離反以降，ほとんど没交渉の状況が続いていた[5)]。また，いずれの委員も雑誌自体への寄稿はしていないことから見て，協力は多分に「名前貸し」の意味合いが強かったのだと思われる。

対象領域のひとつに政治を掲げ，たしかにコラム欄では文学・演劇・映画等と並んで時事的な問題も扱ってはいるものの，雑誌全体としては特定のクレドを謳っているわけではない。その点では，やはりジッドが一時期編集委員をつとめた『コミューヌ』誌と傾向は異なるが，1930年代半ばの時代精神を映して，論ずる対象の如何にかかわらず社会へのコミットという色合いはすでに初号からはっきりと窺われる。また後援委員に劇作家が多いことから，演劇にたいする拘りも見てとれる。じっさい初号誌面のほぼ半分（14頁）を占めたのは同時期にヴィユー・コロンビエ座で上演されたマクシム・ガンの『天才児』であった（同作が雑誌で唯一の実質的な創作）。

第2号になると寄稿もいくつか掲載されるが，いずれも今日では名を耳にすることさえ稀な執筆者による評論や短詩で，内容にもこれといって見るべきところはない。ほかの文章はすべてラングロワの筆になり，結局のところ彼の個人雑誌という性格を脱し切れていないのが実情である。また様々な目標が勇ましく表明されるものの，それ以上の進展はなく，意余って力足らずの感は否めない。経済的基盤が脆弱なだけに，掲げた目標に見合うだけの作品を速やかに提供できなければ短命に終わるのが文芸誌の常だが[6)]，『タン・フュチュール』はまさにそのひとつであった。ジッドにかぎらず関係者のだれも同誌の存在意義を語り継ぐことがなかった所以である。

註

1）雑誌初出にかんし現時点で最も網羅性の高い書誌は次のもの―― Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston : G. K. Hall & Co., 1974.

2）初期の著作は戦時の状況を反映して反ドイツ的な内容のものが主である。Voir par exemple Gabriel LANGLOIS, *La Clergé, les catholiques et la guerre*, Paris : Bibliothèque des ouvrages documentaires, 1915 ; *L'Allemagne barbare*, Paris : Walter et Cie, 1915.

3）*Temps futurs*. Revue des Idées Nouvelles, année 1ère, n° 1, janvier 1934, p. 1. この綱領は第 2 号の巻頭にも再録される（voir *ibid*., n° 2, mars 1934, p. 33）。

4）*Ibid*., n° 1, p. 4.

5）Voir Michel DÉCAUDIN, «Sur une lettre inédite de Gide à Saint-Georges de Bouhélier», *Revue des Sciences Humaines*, juillet-septembre 1952, pp. 273-276 ; Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De «Paludes» à «L'Immoraliste» (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, pp. 168-175.

6）たとえば 20 世紀の幕開けから第 1 次大戦勃発までの期間にかぎっても，3 号以内で廃刊になったパリの文芸誌は少なくとも 150 を超える。Voir Roméo ARBOUR, *Les Revues littéraires éphémères paraissant à Paris entre 1900 et 1914*, Paris : Libr. José Corti, 1956.